
未来に着いたらほんとにガンダムがいた

アラン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来に着いたらほんとにガンダムがいた

【Nコード】

N5668S

【作者名】

アラン

【あらすじ】

前回書いた「未来の世界にガンダムが」の続きです。前作を見てください。わがわがわかりやすいかもしれません。よろしくお願いします。

ガンダムと出会った日

「いててえここどこだよほんとに未来に来たのか俺は？」未来に来たのは確からしいがこれからどうすればいいのかわからない・・・

「うおっ。すげえ本物のガンダムじゃんこいつを使っとうすれば・・・んそうだとりあえずA E Uの新型M Sの式典に行かなきゃてかここどこだよおおおお」んなわけでここはA E Uの領土内らしいけど近くの人に聞いてみるか。おっいたいた

「すいませえん」

「誰かね君は」

グラハムだあああんでビリーもいるし・・・

「あのA E Uの式典に行きたいのですがどうすればいいのかわからなくて」

「私たちも今から行くところだ。君も来るか？」

「はい！いかせてもらいます」

てなわけでグラハムに送ってもらったんだけど

「ありがとうございますグラハムさんビリーさん」

「いや、かまわないさ君も新型M Sの見物かな？」

「まあそんな感じです」

「そうかなら一緒に見物と行こうじゃないか」

「グラハムさすがにそれは・・・」

「いいじゃないかこれも何かの縁だ。なあ少年」

「はい！」

「しかたないなあ。怒られても知らないぞ」

「そのときはそのときさ。ところで君の名前は？」

「僕はアランです。アラン・イクシオンです」

「そうか。いい名前だなところでなぜおれたちの名前を？」

「それは・・・」まずいどうすればいい。くっ

「どうした少年？」

「いえいえ、あなたが有名だからじゃないですか」

「そうか。それは嬉しいな。おっとこれから始まるぞ」

「でわいきましょうか」

んなわけで始まったパイロットは不死身のコーラサワーだからな。
まどうせガンダムに撃墜されるんだしそろそろ俺のほうも準備しな
きゃMSストライクガンダムこれで・・・

「どうした少年ばーっとして」

「いえなにも」

「そうかならいいんだ」

「んなんだあれは」一人の男が指をさした先には・・・

「AEUはもう一基新型がいたのか」

「ちがうあれは」

何かが接近してるようだ。俺はもちろん知っているガンダムだ

「アンノウンが接近してます」

「なにっ」

「通信電波が遮断されました」

「なんだと」

そのころ・・・

「くそパトリック。ちっ応答がない」

「通信電波が遮断されているようです」

「失礼」

「あっ君っ」

「失礼だといった」

「G・U・N・D・M」

「グラハム」

「どうした」

「彼がいないぞ」

「どこへいった」

急げ急げエクシアが離脱する前に合流しなきゃ

「いくぞストライクン操縦がすべて俺の頭に・・・これはいけるぞ」

「OSは完ぺきだ。もとからちゃんとできてるよしっ」ずばーー
ーん

「何だあの機体は。んもう一機接近してきます」
「なんだと」

「よしなんとか間に合ったか。ありやうやあもうやられてやがんの」
「ガンダム・・・」

「えっ」
「その機体はガンダムだな」
「そうだけど」

「なら。武力による介入を開始する」
「なっちよつまでよ。ちっ言うことをきかねえかならばっ」

「新型同士が戦闘だと。互角だ」
「あのガンダムは確かさっきの」
「うおおお」

「その動きじゃ俺には勝てない」
「くっ」

駄目だぜんぜん勝てそうにねえ。どうすれば

「おい刹那」
「何だロックオン」
「そのガンダムは味方だ」
「なにっ！」

「スメラギ・李・エノリエガから緊急ミッションだ」
「了解」

ふう間一髪セーフだ
「おいそこのガンダム」
「なんだ」

「援護頼むぞ」
「了解」

なんて数のMSだこれを俺たち三人でやるのかよ
「とりあえずはソードウェポンだ」

「なにつあのガンダムは換装するのかつ」

「うおおおおお」

ばごーん

「まずは一機目だ。次はっ」

なんとかミッシヨンは終わらせた。これから二人と合流しこれからのミッシヨンに備える。

「お前そのガンダム太陽炉のせてねえなあ」

「そうだが」

「なんでそんなガンダムが現れたんだ」

「あんたらを救うためだ」

「へえ、俺たちもなめられたもんだ、なあ刹那」

「・・・・・・」

「つまあこんなとこだ。これからよろしく頼むぜ」

「こちらこそよろしく」

「とりあえずは休むぞ。俺たちは世界に喧嘩を売ったんだあ休めるときに休んどかなきゃな」

そして俺たちは次のミッシヨンを待つのだった。

宇宙での戦い

アランの戦闘は終わり、とりあえず落ち着いている。その頃宇宙では・・・

「今日はやけにデブリの干渉が多いな」

「質量が大きいんじゃないか？」

「最大防衛でチェックしろ、今日は式典だということを忘れるな」

「最大防衛でます」

「なんだあれは」

「MSです」

「デブリに巻き込んでいやがった」

「シールドの干渉で人体に影響が」

かしゅんっ

「ほらいわんこっちゃない」

「総員出撃準備だ！」

「まずいミサイルが」

「これでは間に合いません」

ごぼーーーーん

「なんだっ」

「キュリオス目標を破壊する」

「うわーーーー」

ばごーーーん

「ティエリアっ」

「目標を破壊する」

しゅううううううう

ばーーーーーーん

「うわああああ」

ばごーーーーん

「やりすぎだよ」

「まずいまだいたのか」

「くっ、これじゃあ間に合わない」

「・・・目標を破壊します」

ずばばーーーーーん

「ばかなっ」

ごばーーーーーん

「撃破に成功」

「あのMAはいいたい・・・」

「そのMA、聞こえるか？」

「聞こえています」

「お前は何者だ？」

「私はリル・イクシオン」

びびっ

「ティエリア」

「わかっている、スメラギ・李・ノリエガこれはいったい」

「それは後よ、とりあえず帰還して」

「「了解」」・・・

その頃地上では・・・

「アラン・イクシオン」

「なんだ」

「なぜ貴様がガンダムを所有している？」

「まあ、神からのプレゼントだな」

「神だと？」

「そうだ」

「貴様の神はどこにいる？」

「え・・・」

「貴様の神はどこにいるのだと聞いている！」

「おいおい、そこまでにしとけよ刹那」

「わかった」

「これから一緒に戦うかもしれないんだあ、仲良く行こうぜ」

「……」

「おっ、始めちゃった、始めちゃったぜ」

「もう俺たちは止められない……かぁ」

「そうだな、俺たちは止まらねえ」

「トマラナイ、トマラナイ」

とうとうあの放送が始まった。これから俺は戦いの中へ入る。そう、武力による介入を開始するのだ。

ぶーーーーーん

「ガンダムめ、戦いを戦いで止めるだど？」

「ガンダム、存在自体が矛盾しているぞ」

キーーーーー

「グラハム・エーカー中尉、ビリー・カタギリ技術顧問、軍への帰等をお願いします」

「その胸をよしとしよう」

そのころ宇宙では……

「スメラギ・李・エノリガ説明してもらおうか」

「わかったわ、この子は新しいガンダムマイスターよ」

「なんだと！そいつはベーダには選ばれていないぞ」

「そうよ、だけど、そのベーダから報告が入ったの」

「そうか、それならいいんだ」

「よろしくね」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

「そういえば、地上にも一人いたような」

「それはたぶん私の兄です」

「二人揃ってなぜガンダムマイスターに？」

「私たちは選ばれし存在、そう、この時代を守るべき存在」

「守るべき存在だと」

「そうよ、ベーダも認証してるわ」

「なら彼女たちは味方ととってもいいのか？」

「そうね、当分は味方として見るわ」

「まだ私は信頼したわけじゃない」

「ティエリア・・・気にすることないよりル」

「ありがとうございます。でわ私もここでしゅわーん

これから武力による介入が始まる。それと同時に、アランそしてリルの戦いが始まる。

マイスター集結

あの放送が始まってだいぶたつな、俺もこれから頑張らなくちゃな、おっ合流か、楽しみなな。

「ここが合流地点か」

「そうだな、ここで修理だのなんだのをするんだ」

「トレーナー2つしかないんだけど・・・」

「ん、ああ気にすんな、お前のもいづれ来るさ」

「そうだといいんだけど・・・」

がさ、がさ、がさ

「誰か来たみたいだな」

「おっわりりゅうみんな、お早い到着で」

「次のミッションよ、あら、そちらの方は？」

「俺はアラン・イクシオンだ」

「そうでしたか、よろしくお願いします」

「こちらこそ、よろしく」

「次のミッション・・・」

「始めますかあ」

「地上へおりるらしいな」

「まあ、初めてなんだけど、大気圏への突入は」

「初めてなんだけど大丈夫でしょうか？」

「君は私の足になるんだ、GN粒子を最大出力で放出する、任せてくれ」

「はい・・・」

「心配みたいだね」

「初めてですから・・・」

「そろそろ時間だ、行くぞ」

「「了解」」

ずばーーーーーん

3つの閃光が地球に近づいた。

「大気圏突入する」

「ううう・・・」

「心配ないさ、ティエリアは信頼できるよ」

「はい・・・」

ずばーーーーーん

地上では・・・

「そろそろ到着だ、おっ来た来た」

「目標を補足した・・・なにつ」

「3機だと、聞いてねえぞ」

「新型か・・・」

「ちがう、あれは・・・」

「ティエリア、そいつは誰だ」

「紹介する、新たなマイスターリル・イクシオンだ」

「なんだってえええ」

「まさか、兄弟か？」

「ああ、間違いねえ」

「兄さん？」

「なんでお前まで」

「私も聞きたいくらいよ」

「話は後にしろ、始まるぞ」

「民族紛争・・・」

ずばーーーーーん

どばーん

ずばーん

「よし、このまま制圧するぞ」

「隊長、こちらにガンダムが来るようです」

「そうか、それなら早いな、各機ガンダムへの攻撃を開始する」

そろそろ始まるな紛争根絶俺は初めてだが大丈夫だろうか、そして妹だ。なぜあいつがここにいる、まあいい

「スメラギ・李・エノリガから通信だ、それなりに戦果を期待する。だそうだ」

「それなりにね」

「私は徹底的にやらせてもらう」

「刹那、応答しろ、刹那っ」

「ガンダムだ」

「へ？」

「俺がガンダムだ」

「なんだって」

ずばーーーーん

「子供のお守よろしく」

ずばーーーーん

「戦闘に移る」

ずばーーーーん

「おっおい、」

「後は任せます」

ずばーーーーん

「お前まで、」

「なんで俺が二人も・・・」

「ビンボークジ、ビンボークジ」

「わかってらあ、さあてと、行きますかあ」

「了解ッス」

今戦闘が始まる

初めての武力介入

戦闘が始まった。みんなが散らばって戦っている。俺と刹那とロックスオンは
と言うと・・・

どばーーーーー

ごぼーーーーー

「隊長、こちらにガンダムが近付いているようです」

「そうか、各機敵が片付いたら、ガンダムに集中しろよ」

「了解です」

しゅーーーーー

「来たか」

「紛争を確認、これより介入を開始する」

ずばーーーーー

しゃきーーーーー

しゃきしゃきーーーーー

「なんだあれは・・・うわああああ」

どばーーーーー

「ロックオンストラトス、狙い撃つぜえ」

しゅいーーーーー

しゅいーーーーー

どばーーーーー

ごぼーーーーー

「俺だって負けるもんかよ」

ずどーーーーん

しゃきーーーーん

ふあんふあん

しゃきーーーーん

「こっちもOKだ」

「よし、撤退するぞ刹那」

がたん、がたん

「協力を感謝する」

「なっあいつら」

「これで一気にたたき込むぞ」

「刹那っ」

しゅわーーーーん

しゃきーーーーんしゃきーーーーん

「すっすげえ」

「刹那あ」

「ロックオン、刹那とアランはどうした・・・まさかやられたのか」
「いや、先に帰島した。初めての介入だ。思うことがあるんだろう」
「刹那Fセイエイ。なぜ彼がガンダムマイスターなんだ。そしてあの二人・・・」

「兄さん・・・」

刹那とアランは・・・

「お疲れさん刹那」

「・・・・・・」

「返事しろよおい」

「ピピッ、この空域に輸送機だと」
しゅーーーーんずばーーーーん
がしいーん

「初めましてだな、ガンダムっ」

「何者だっ」

「私は君の存在に惚れた男だ」
「くっ」

「大丈夫か刹那」

「俺一人で十分だ、うおおおお」

「くっ、圧倒されただと」

「やるつかよ」

しゅいーんすばーん

「ビームサーベルだと」

しゅわーん

「大丈夫か」

「問題ない、帰還する」

撤退した俺たちは次の日バーベキューをするのだった。

とりあえずバーベキュー

とりあえずスメラギさんから休暇をいただいた。なのでみんなと交流を深めるべく、バーベキューすることになった。ティエリアや刹那はいやがったが、そこは強引にひきつれたのであった。

「ようやく着いたぞ」

「やっぱり海は気持ちいいね」

「ああ、最高だな」

「せっかくの休暇を無駄に過ごすとは」

あいかわらずティエリアはぐちぐち言ってる。

「まあまあそう言わずに、役割を発表するぞ」

と発表しようとしたら

「ちよつとまった」

「なんだ」

「刹那の散髪をしなきゃならないんで俺たちは後で手伝うぞ」

「OKだ」

てなわけでロックオンと刹那は散髪に行き、ティエリアは飯を作る役でティエリアはその手伝い、俺とリルはティエリアに飯の作りを教える役ということになった。

「これはこれでいいんだなアラン」

「ああ、そうだうまいなあティエリア」

「ちやかさないでくれ」

「あつごめんごめん」

「こっちはできたよリル」

「ありがとう、次はこっちお願いね」

「うん」

リルとアレルヤは上手くいっているようだ。うらやましい限りだな

「おいアラン」

「あつへいへい」

刹那とロックオンは・・・

ちよき、ちよき

「どうよ、刹那」

「ああ、上手いな」

「俺はこっちのほうもなかなかなんだぜ」

「そうだったのか」

ちよき、ちよき

「よし、完成だ」

「その・・・ありがとう」

「ああ気にすんな」

「ん、いいにおいだな」

そこに・・・

「できたぞ」

「そうか、行くか刹那」

「ああ、行こう」

「しっかりしてくれ」

そのあとワンリユウミンの家に届けられ目が覚めその一日は終わった

GNドライブ

バーベキューも終わり休暇が終わった俺たちは、俺とリルとティエリアで宇宙に上がることになった。なんと俺のストライクとリルのスカイグラスパーにGNドライブが搭載されるらしい。それが2日前になぜか補給コンテナの中にGNドライブがまぎれていたらしい。これもあの女神さまが届けて下さったのだろう。とりあえず宇宙に上がることにした。

「よう3人とも」

「みんな早いな」

「ははっなんせリニアでガンダムを運ぶんだぜ？」

「それもそうだね」

「でもほんとにリニアでガンダムを宇宙にあげられるのかい？」

「ああ、なんとか宇宙にあげられるらしい」

「重ささえ何とかなれば大丈夫なんだろう？」

「まあな、それはそうと3人とも宇宙のほうはたのむぞ」

「任せてくれ」

「そうね」

「地上のほうは君たちに任せたぞ」

「ああ、任せてくれ」

「そろそろ行くわ」

「ああ、頼んだぜ」

「おうよ」

数分後・・・

「そろそろティエリアたちのリニアが上がるね」
「そうだな、ばれないよう祈るばかりだ」
「頼んだぞ」

リニアでは・・・
「すげえほんとに宇宙に上がれるなんて」
「信じられないよね」
「少しは静かにしてくれ」

「ああ、すまない」

「そういえばティエリアってヴェーダヴェーダって言うけど・・・」

「あたりまえだ。ヴェーダあってこそそのソレスタルビーングだ」

「それはそうだけど・・・」

「まあまあ」

「ふん・・・」

「やりずれえ」

数時間後・・・

「ティエリア・・・着艦します」

「アラン・・・着艦するぞ」

「リル・・・着艦します」

ぴっぴ

「ミッションはどうなったんだ」

「ええ、成功したわよ」

「よかったあ」

「それではみんなで祝杯をあげましょ」

「やったあ」

「私は慎んで辞退します」

「んもお、いけずう」

「私も部屋でゆっくりします」

「リルもかあ、じゃあみんなで乾杯だ」

「ブトレマイオスでは・・・」

「ふう飲んだ飲んだ」

「ほんとスッキリしたわあ」

「それよりアラン」

「なんですかおやっさん」

「GNドライブの件なんだが」

「ああはい、行きましょうか」

「ああ」

しゅいーん

「あのガンダムにGNドライブを乗せるための期間は、3日ほどで大丈夫だ」

「そうですか。俺も手伝います」

「よしじゃあリルの機体のほうは任せたぞ」

「あいよ」

しゅいーん

「兄さんちよっと」

「ああ、すいませんすぐ終わらせるんで」

「ああ、行つて来い」

しゅいーん

「何の用だいったい」

「この世界はどこよ、どうなってるのよ」

「ここはなあ、ガンダムの世界・・・いや未来に来たんだよ俺たちは」

「うそでしょ・・・うそって言ってよ」

「ほんとなんだよ、俺もわけわかんねえんだよ」

「うう・・・うわあああん」

「おい・・・」

しゅいーーん

GNドライヴはなんとか乗せれた。これでもっと戦闘が楽になるだろう。

介入による世界の変化

今日はとんでもないニュースが放送された。内容はこうだ、北アイランドの組織リアルIRAが武力によるテロ行為が事実上なくなり、平和への道が開かれるとのことだ。俺たちの行動により世界が変わることがよくわかる。俺たちは紛争または戦争が続く限り何度でも介入する。そんな時緊急ミッションが入った。

アラン「アレルヤが人命救助？」

ティエリア「そうだ。次のミッションの前にこんな行動を犯すとは」

内容はこうだ。アレルヤが宇宙に上がって間もなく、頭痛が発生しそして人革連のMSが暴走したといことだ。間違いなく脳量子波が原因であらう・・・

アラン「それで俺たちも手伝うのか？」

ティエリア「いや、僕らは出撃しなくていいだろう」

そんなときスメラギさんが来た

スメラギ「そうもいかないわ」

アラン「GNドライブでなんとかなるんじゃない？」

スメラギ「いえ、時間稼ぎにしかないわ」

アラン「そうか、なら俺たちが手伝うぜ」

そのときティエリアがその場から立ち去った

アラン「どこ行くんだよティエリア」

ティエリア「私はその作戦には出ない」

ティエリアは部屋から出て行った

アラン「なら俺とリルを使ってくれ」

スメラギ「そうね、これはガンダムを守るための戦いよ」

アラン「そうだな、なら出るぞ」

カタパルトに行き俺とリルが出撃した

そのころ・・・

セルゲイ「もうもたん、ガンダムのパイロットここが限界だ」

するとアレルヤが

アレルヤ「ガンダムマイスターは1人じゃない」

そのときだ、俺とリルで作戦エリアに入り地上の2人を使わずに作戦に出た

アラン・リル「待たせたなアレルヤ・お待たせ」

アレルヤ「よかった間に合って」

リルが対艦刀で二つを切り離し、俺とアレルヤで一気に押し返した

アレルヤ・アラン「うおおおおおお」

するとみるみる地球から離れて行った、その時だ人革連が到着し人命救助を始めた。ありがたいことに俺たちを見逃してくれるらしい

アラン「ありがとうスミルノフ大佐」

セルゲイ「なぜ私の名前を」

アラン「ロシアのあら熊・・・でしょ」

セルゲイ「そうだ」

アラン「でわそろそ俺たちは行かせてもらいます」

セルゲイ「わかった、でも次会うときは私たちと君は敵同士だ」

アラン「そのときは全力で行きます」

そして作戦エリアを離脱した・・・

場所…プトレマイオス

ティエリア「終わったのか」

スメラギ「そうよ、上手くいったわ」

ティエリア「あなたは愚かだ」

するとアランが部屋に入って来た

アラン「それは違うぞ」

ティエリア「何？」

アラン「スメラギさんはガンダムを守っただけだ。それ以上でもそれ以下でもない」

ティエリア「ふんっ」

そのままティエリアは部屋を出た

スメラギ「アラン、あなたはティエリアの事どう思う？」

アラン「そうですね、いつか僕らと分かりあえる日が来ると思いますよ」

スメラギ「そうね、ティエリアはどうなのかしら・・・」

作戦は終わり俺たちは休息を取った

介入による世界の変化（後書き）

すいませんみなさん、時間の都合上1カ月もあいてしまいました。
書き方を変えてみました。これからも頑張るのでよろしく願います

新たな装備

アレルヤの独房入りが決まった。人助けしたことでわたくし独自の行動によるものだ。違反したことは確かにいけないことだ、でも独房入りはひどすぎると思った。その原因は脳量子波が原因だと思う。このことについてアレルヤと話してみよう・・・

場所…プトレマイオス

クリスティナ「人助けぐらいいいじゃない、独房いりなんて・・・」

アラン「俺もそう思う、だが独断行動はだめだろ」

ラッセ「アランの言う通りだ」

アラン「もう一週間になるんだな、アレルヤの独房入り・・・おれちよつとアレルヤの部屋に行ってくるわ」

アレルヤの部屋が開いた

しゅいーん

アラン「ようアレルヤ」

アレルヤ「やあ、独房入りは終わりかい」

するとティエリアがやって来た

ティエリア「その様子では反省しているようには見えないが」

アレルヤ「そうだね」

ティエリア「君はガンダムマイスターにふさわしくない」

アレルヤ「僕をキュリオスから降ろすきかい？」

アラン「そういいたいのらしいけど・・・」

そのときスメラギがやってきた

スメラギ「またあなたの力が必要になったの」

アレルヤ「スメラギさん！」

スメラギが今の状況を話した

スメラギ「ハードなミッションになるから私たちも地球に降りることにしたの」

アレルヤ「そうですか」

アラン「そういうことだ」

スメラギ「アレルヤの独房入りは解除、3人とも出撃準備をして」

アラン・アレルヤ・ティエリア「了解」

イアンバステイが新装備を作ったのことで俺は先に地球に降りた

アラン「俺大気圏突入するの初めてなんだが大丈夫だろうか」

すると大気圏突入が始まった

アラン「ううううう、すごいな・・・」

しゅいーしゅいーん

そのころリルは・・・

リル「この作戦すごくハードだけど大丈夫なの？」

アレルヤ「そうだね、難しいかもしれないけどこれがガンダムマイ

スターだから」

ティエリア「その通りだ、私たちはガンダムマイスターだ」

リル「そうよね、みんなでがんばりましょ」

その頃地球では・・・

アランは地球に到着し新装備を受け取った。その名は新たなストライクパッカーライトニングストライカーとI・W・S・Pだこの装備の追加によりさらに戦闘の枠が増えた。

アラン「ありがとうイアンさん」

イアン「ああいいさ設計図さえあれば作れないこともなかったからな」

ロックオン「設計図って？」

イアン「ああ、アランが設計図を俺に渡してくれたんだ」

ロックオン「そうなのか、すげえなアラン」

アラン「いやいや、それよりそろそろ戦闘だ、準備しようぜ」

ロックオン「そうだな、お前今日何のストライクパッカーで出るんだ？」

アラン「そうだなあいつか全部合わせたいな、今日はライトニングで出る」

イアン「それじゃあ換装させておく、楽しみにしとけよ」

アラン「ああ楽しみにさせてもらうぜ」

換装が終了し俺たちは合流地点に向かったそのきだ

ロックオン「敵さんがこちらに気づいたようだ、各機ミッションプランに沿って行動しろ。暗号回線は常時あけておけよミススメラギから変更プランが来る」

マイスター全員「了解」

戦闘が始まった・・・

P M Cトラスト

P M CトラストとA E Uの連合軍との戦闘が始まった。厳しい戦闘になると思うが俺たちは戦い抜かなければならない、アランとしてガンダムマイスターとして・・・

場所…A E Uの軍事基地

戦闘が始まった、でもよく見るとみんなガンダムの性能に頼りすぎているのが分かる。これでほんとうに勝てるのか？心配になった。

アラン「そこだっ」

ばごーん

アラン「一機撃破だ、もっと来い」

みんな順調にミッションプランを遂行している、しかし緊急連絡がきた。アランは対応する

アラン「どうした」

スメラギ「刹那が・・・コックピットハッチを開けたの」

アランは動揺を隠せなかった

アラン「戦闘中だぞ・・・まさか」

そうアリアル・サーシェスだ、奴の存在を確認するためハッチを開けたに違いない俺はスメラギに返事をした

アラン「スメラギさん、俺も刹那のほうへ向かう、こちらはもう終わった」

スメラギ「わかったわ、ミッションプラン変更すつとばしてフェイズ4へ移行よ」

アラン「了解」

そしてアランは刹那のほうへ向かった・・・

その頃刹那は・・・

刹那「アリアルサーシェスか」
「???」「なぜおれを知っている」

刹那「まさか生きていただと」

そんなばかないきばをなくしてPMCに入ったのか

サーシェス「だがなぜおれを知っている、さっきの剣さばきと言ってお前まさか」

刹那「そうだ、俺はクルジスの時の少年兵だ」

サーシェス「そうかい、殺し甲斐があるぜ」

刹那「なっ!」

そのときロックオンがサーシェスの機体を撃った
ロックオン「大丈夫か刹那っ」

刹那「ああ大丈夫だ引き続き任務を遂行する」

そのときサーシェスの機体が離脱したが・・・

サーシェス「ちっ邪魔が入ったか・・・」

すると目の前にアランの機体があった

サーシェス「ほお、俺と一騎打ちってかあん?」

アラン「そうだアリアルサーシェス、貴様と勝負をしたかった。
一気にやらせてもらおうぞ!」

サーシェス「そうかい、本気でこいやああああああ」

しゃきーんサーシェスとアランが交わるどちらとも引きがなくな
い勝負だった

サーシェス

なんだあのがきクルジスのがき以上じゃねえか聞いてねえぞまあ
い俺があいつをつぶしゃあそれでおしまいだぜ

アラン「そろそろ決める」

そのとき・・・

??? 「一斉発射だ」

アランは無数の玉によけきれず被弾した

アラン「なんだっ」

そこにいたのは・・・

敵と味方の増援

びゅーんびゅーんアランは一斉掃射された・・・

アラン「なんだ・・・」

後ろを振り向くとそこには・・・

??? 「ガンダムを見つけたぜえやろうどもいきなっ」

この声はパトリックだった

パトリック「ガンダムう今日こそ敵を討つぜえ」

アラン「くっ・・・」

サーシエス「おいおい俺の獲物をとるんじゃないよ」

この二人を相手にするのはさすがにきつかった

アラン「くっこのお」

サーシエス「あめえんだよお」

パトリック「へへ、隙がありすぎるぜ」

しゅわわーん

パトリックの弾にに被弾した

アラン「くそっ」

その時だ！・・・

リル「大丈夫兄さん？」

アラン「リルか！」

リルが救援に来た・・・

リル「ほかのマイスターム来るわ」

アラン「そうか、ありがとよ」

リル「それとそろそろエネルギー切れでしょ持って来たわI，W，

S，P」

アラン「行くぞ、空中換装だ」

リルのスカイグラスパーからI，W，S，Pが放たれたそして装備を装着しポーズを決めて（インパルスのような）戦いを再び始めた

アラン「行くぞうおおおおおおおお」

サーシエス「なんだっこれは」

パトリック「聞いてねえぞお」

そのとき4機のガンダムが到着した

ロックオン「行くぜハロ」

ハロ「リョーカイリョーカイ」

刹那「サリアルサーシエス貴様を・・・駆逐するっ」

ティエリア「目標を破壊する」

アレルヤ「おまたせアラン僕らも加わるよ」

アラン「ありがとうみんな、よっしゃーいくぜええ」

それを見た連合軍は

パトリック「くそ聞いてねえぞおオオ」

そのときだティエリアのGNバズーカがあたり中破した

パトリック「なんじゃそらああああああ」

サーシエス「ちいやられやがったか、俺たちも撤収するぞ」

刹那「逃げるのかっ」

サーシエス「へへ、また会う時まで死ぬんじゃねえぞおクルジスの

がきがあ」

アラン「敵さんは逃げた、こちらで撤収しよう」

マイスター全員「了解」

そして戦闘終了後・・・

スメラギ「みんなお疲れ様今日はご苦労だったわね」

スメラギがそういうと意外な反応をした

アラン「そんなことないですよマイスターですし」

ロックオン「ああそうだなこれくらいこなせなくちゃな」

刹那「その通りだ、俺たちはガンダムマイスター世界を促すもの」
ティエリア「僕らはガンダムマイスターで世界を破壊する」

この反応にスメラギは驚いた

スメラギ「あはは、お疲れ様今日はゆっくり休んでね」

アラン「それにしてもコンビネーションがよくなったっていうか」

ロックオン「そうだな、この調子で盛り上げていこうぜ」

この調子で俺も頑張りたい、仲間を失いたくないそれだけを考えて行動をしてきた。こんなにいい仲間を持ったのは初めてだ、こっちに來て正解なのかもしれない俺はこの世界で頑張ろうと思った瞬間だった・・・

無差別テロによる脅し

バンッ

刹那はコクピットから出た、さらに自分の顔まで見せたせいでロックオンに殴られた

ロックオン

「刹那、どうして殴られたかわかるよな？」

そういうと刹那はそっぽを向いた

ロックオン

「理由ぐらい言えって」

刹那

「・・・・・・」

アレルヤ

「規則違反をした僕が言うのもなんだけど、僕らはヴェーダによって選ばれたんだ刹那も・・・アランはどうなの？」

そう思えばおれはこの世界に本来なら存在しないはずヴェーダにおける情報があるのだろうか

アラン

「そうだな、ティエリアおれの情報ってあるのか？」

ティエリア

「いや、やはりなかった」

そこにイアンが急いでこちらに向かってきた

イアン

「大変だぞお前ら、テロが脅しをかけてきたぞ」

5人

「なんだって！」

そうテロ組織が介入をやめないとテロを起こすとソレスタルビーングに脅しをかけてきたのだ

ロックオン

「くそつたれが・・・」

そういうとティエリアがへきそうな顔で

ティエリア

「ロックオンストラトス、あなたもこんな状況になるとわかっていたはずだが？」

アラン

「おい！ティエリア」

そういうとロックオンがティエリアの胸ぐらをつかんだ

ロックオン

「お前は何とも思わないのか！」

ティエリア

「ええなんとも思いません、あなたこそどうしたんですかいつも飄々としているあなたが」

ロックオンの過去は知っているテロのせいで家族を失っている反応でもおかしくはない

ロックオン

「テロが憎いんだよ・・・おれの家族は・・・」

アラン

「そこまでだロックオンそのくらいにしておけ」

ロックオンが覚めた顔をして

ロックオン

「ああすまねえな」

アラン

「全然いいんだいろんな過去があるんだ・・・聞こうとは思わない」

イアン

「急いで戻ってこいよお前ら」

5人

「わかった」

ハロ

「ミナ、ナカヨク、ナカヨク」

アラン

「そうだな、さあみんな戻ろうぜ」

場所…刹那の過去の中

刹那の母

「やめてソランなんで・・・」

刹那

「・・・」

パンツ

刹那の銃弾が母の頭を貫いた

刹那

「・・・」

刹那はそのまま広場へ向かっていく

サーシエス

「よくやったみんな、これで君たちは神に認められたぞ」

子供A

「これでようやく戦えるぞ」

子供B

「やったな刹那」

刹那はうなずく

翌日……

刹那

「やめようよ死んじやうよ」

子供は怒って刹那の胸ぐらをつかんだ

子供C

「その行為は神を冒瀆する行為だぞ死ぬのが怖いだと、冗談じゃない」

刹那

「やめようよ」

クルジスは激戦区になっていたもちろん人は死んでいく

サーシエス

「あの子は神のために死んだ、仕方がなかったんだ」

刹那

「……」

刹那がとめた少年兵は死んだ……

サーシエス

「今日は剣裁きを教えようか」

子供D

「やったなおい」

刹那

「うん、これで強くなれるかな」

無差別テロによる脅し（後書き）

この話は後半へ

刹那の過去の変化

ここは刹那の中、刹那は過去の事を思い出している。少年兵であった頃の自分を・・・

刹那はクルジス出身その時自分の犯した行為友達を見捨てた、親を殺したそして奴がいた・・・アリアル・サーシエス、彼はこの時刹那の組織にいたボスの存在で彼にいろんなことを教わった。戦い方、生活、そして神すべてを教わって来た、そして・・・

サーシエス

「さあかかってこい！」

サーシエスは冷静な声で刹那に言った「うおお」刹那は向うがもちろんかわされる。攻撃をかわされ、すきをつかれる。そしてころんだ

刹那

「ううう」

サーシエス

「甘いなあ、そんなんじゃ殺されるぞ？」

刹那

「すいません、もう一度」

刹那は繰り返し返していた。なんどもなんどもこけてそして立ち上がり立ち向かっていった。そして月日は上り

サーシエス

「今日は侵入してきた不審公社どもに鉄槌を下す時が来た。我々は立ち上がり奴らを裁かねればならん・・・行くぞ!」

刹那もちろん参加した、一人の兵として・・・

刹那はかけた、戦場の中を逃げて逃げて、するとMSにばれや「くそっ」刹那はひたすら走る、戦場を、息を切らしながらすると上から粒子ビームが撃たれた

どんどんMSが撃破されていく中刹那の中央にMSが現れたOガンダムだ「なっ」刹那は驚いた、そこに存在するはずのないガンダムがいたのだ。

刹那

「そんなばかな、あれは・・・ストライクガンダム!」

そう、そこに存在するはずのないアランの機体、エールストライクの姿が見えたのだすると夢は消えた、現実に戻る

刹那はアランの隣の部屋だすぐに走る、そしてアランがいた

刹那

「貴様!なにをした」

アランは反応できない、自分が何をしたかわからないからだ。
アランも驚きながら答えた

アラン

「何だよ刹那」

刹那は落ち着いた、いきなり自分がこんなこと言って相手が驚くのは当然だ

刹那

「すまない、実は・・・」

刹那はすべての事を話した

アラン

「そんなわけねえだろ、俺が過去から来たのは確かだが・・・」

アランも過去からきたが事実道理あの時間に存在してはいない何があったのか自分でもわからない、存在しないはずなのに・・・

刹那の過去の変化（後書き）

今日はここまでです、この前の話からだいぶ時間が経ちました、なぜって？それはですねキーボードが壊れたからです。

刹那

「嘘をつくな！貴様は面倒だからしなかったただけだろうに」

作者

「そんなことはないですよでわ今日はここまでさよならあ」

テロ組織を断つ

あの組織の情報がまだ来ない、早くにでもつぶしたい気持ちでいっぱいだ。

何よりロックオンはテロ行為に非常に敏感に反応する。彼の過去にテロが絡んでいるからだろう。

彼の家族はテロ組織に殺された、刹那のグループに・・・

ここは船の上だなぜか知らないけどスメラギさんたちが水着に着替えている

アラン

「こんなときになにしてるんすか」

アランがあきれた声で言う

スメラギ

「仕方ないでしょ、今は王瑠美の情報を待つしかないじゃない」

イアンが3人の水着をちらちら見ている、腹がたつが我慢しようこんな状況なのに水着に着替えるって・・・「強がってるのさ」

ロックオンが口を挟んできた

ティエリア

「我々が組織の全貌を知る必要はない」

ティエリアがきっぱり言い張るがやはり納得がいかない、こんなことをしている間にも人が死んでるというのに・・・

アラン

「こんな状況でもヴェーダに頼るしかないのか・・・」

じんまりとした空気が流れている

場所が変わって王瑠美の屋敷

ここではテロの情報を王瑠美が探している

エージェント

「このテロは国際テロネットワークとされます、これで3台国家のすべてに攻撃されました」

王瑠美が冷静に返事をする

王瑠美

「待つしかできないってつらいことね・・・」

また場所が変わってある島

アラン

「フェルトってハロのこと好きなんだな？」

フェルト

「うん、かわいいから・・・」

照れた顔で返事してきたそれがまたかわいかったりするもんだ

アラン

「よかったらさ、フェルト用のハロを作ってあげようか」

アランも照れた感じで返事をした

フェルト

「ううんいいの、あのハロが好きだから」

アラン

「そうか、ならいいんだじゃ」

その場からアランが立ち去った

スメラギ

「各機出撃準備！」

マイスターたち

「「了解」」

アランとリルが2人で敵拠点撃破に向かった

アラン

「頼むぜ、相棒」

リル

「任せて兄さん」

2人の機体が島からとびだった・・・

アランはソードストライク、リルはランチャーシルエットのスカイ

グラスパーで出た

二人でのミッションは初めてだ、2人とも緊張しっぱなしだった。

おれたちは日本での待機となった、自分の家でも探しに行くかのようなテンションだった。

リル

「私たちの家あるかしら」

アラン

「あるわけないだろ、3世紀も先だぜ？でも探してみるのもありだな」

てなわけで2人は自分の家のほうへ行くことにした

場所日本の大阪

俺達は帰って来たもののそこにはあるはずのマンションがなく高層ビルが建っていた。

おれたちはこんな名前だが日本生まれの日本育ちだ。父が日本人で母がアメリカ系の人だった

家について数分後スメラギさんからミッションが届いた

この付近にはテロ組織がおらず、すでに終了したとのことだった。

アラン

「よかったな、リル」

リル

「そうね・・・ふう」

リルが落ち着いて溜息をついた。
また明日からも頑張らなきゃな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5668s/>

未来に着いたらほんとにガンダムがいた

2011年10月5日07時24分発行